

松蔭 校長室だより

2025年 3月 1日 発行

—校長から保護者の皆様へのメッセージです—

松蔭中学校・松蔭高等学校

校長 浅井宣光

塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。

自分自身のうちに塩を持ちなさい。そして、たがいに平和に過ごしなさい。（マルコによる福音書9:50）

高校卒業式 式辞

3月1日、第77回高等学校卒業式を挙行了しました。式辞の一部を紹介します。

ちょうど1週間前、松蔭の母教会である神戸聖ミカエル教会で卒業感謝礼拝を守りました。説教で牧師先生は「自分自身のうちに塩を持ちなさい」という聖句を繰り返して語っておられました。「塩」は、日本語では「塩対応」や「傷口に塩を塗る」といったようにマイナスの意味で用いられることがありますが、聖書に現れる「塩」は重要な意味を持っています。料理の際に塩気を加えるだけでなく、甘味を際立たせるなど隠し味としても使われます。また食品の腐敗を防止する効果や、殺菌や減菌にも作用することから、様々な面で役立つもの、優れたものの象徴です。人間に例えれば、周囲に愛を向け、慈しみをもって接することができる豊かな人間性を指しています。「自分自身のうちに塩を持ちなさい」。愛や慈しみの心あふれる人として、卒業後の人生をおくってくださいというメッセージを送っていただきました。

「あなたがたは地の塩である」。イエスが、弟子たちと彼らをとり囲む群衆に向かって語ったという聖書の有名な一節です。人間の存在を塩にたとえています。大地の塩ですから、あるところにはある、といったありふれたもので、もし地面に塩がまかれたとしても誰も気付きません。そのようなちっぽけで目立たない存在であっても、この世界に住むあなた方は世の役に立ち、周囲に愛や慈しみを及ぼすかけがいのない存在だと言っているのです。

小説家の角田光代さんの作品「タラント」を思い浮かべます。「タラント」は、英語の「talent」、すなわち才能・素質・技量などと同じ意味です。小説の主人公は、洋菓子屋で働く40歳の女性ですが、大学進学のため東京で生活し始めました。学生時代には、国際ボランティアのサークルに入って途上国を訪れて現地を視察したり、支援活動をしたりしていました。人との出会いに魂を揺さぶられたり、挫折を繰り返したりしながら人生を歩んでいましたが、20年を経た今、その活動もせず、結婚して暮らしています。現在の仕事も特に遣り甲斐を感じているわけではありません。

ところが小説を読みすすめていくと、主人公の過去と現在がおりなすストーリーに老若男女、様々な年代の人物が登場します。カメラマン、ジャーナリスト、映画会社の社員、不登校の甥っ子、うどん屋の家族や親戚。戦争で片足を失った90歳の祖父が実は、若い頃は陸上競技選手で、はるかに若い世代のパラリンピックアスリートを支援していたという事実も明かされますが、そのことを家族はだれ一人知りませんでした。

小説に登場する人々の生き様から示されることは、「タラント」とは単純に有るとか無いとかいうものではない、ということです。誰それが持っているけれど、私にはないといった簡単な話ではない、ということです。長い一生にわたって自らのうちにそれぞれの「タラント」を育み続けるとともに、様々な形で保ち続けられるものだ、ということです。

皆さんの入学式で私は、クリスチャンであろうとなかろうと、松蔭が学校生活を過ごすには最も相応しい場であると神様が導いてくれたのだと考えていると話しました。この場で過ごした時間のあいだずっと、皆さん一人ひとり神様に見守られていたとこれまでを振り返っています。一人ひとりが「塩」を自らのうちに得て「地の塩」として存在し、「タラント」を育み続けているというように感じています。

4月から皆さんが踏み出そうとする未来を想像します。大学生活がうまくいけようか。そのあとの社会人生活では、自分にどのような仕事に向いているのだろうか。将来のことを考えると不安でしかたない等々、漠然とした不安は当たり前だと思います。そのような感情が心を占め、歩みを止めようとする時には思い出しましょう。私は「地の塩」として愛されていること。慈しみの心がい

つも向けられていること。自らに「塩」を持つとうとする姿勢が必ず良い働きをすること。そして「タラント」があなたのなかに着実に育まれていること。どうぞ自信をもって歩みをすすめてください。

最後になります。皆さんが巣立とうとしているこの学校は、創立以来133年にわたって2万5千人を超える生徒をキリスト教主義のもとで預かってきました。ですから命の重みやその意味についてはいつも、あなた方の存在と深く結び付けて考えてきました。記憶に残っているはずありませんが、あなたの母は、あなたを身体に宿して10か月の間、大切に育み、あなたを命懸けで出産しました。世に生を受けた子であるあなたを父と母は、もし仮にあなたの身に命の危険が迫るようなことが起こったとしたら、身代わりになって死んでも構わないという覚悟で、今日まであなたを育ててきました。ですから皆さんには、守られてきた18年分の自分の命をこれからも大切にすることを義務があります。VUCAの時代とか、不確実の時代、何が起こってもおかしくない時代と言われています。どのような場面であっても、どんな現実にも直面しようとも忍耐強く人生を生き抜くことが、与えられた命を全うすることだと思います。

同時に、これからの人生であなたが出会う人々もまた同じように誕生し、父母が命をかけて守られてきました。魂の深いところで触れ合う人もいます。ネット、SNSでつながる世界中の人々との出会いがあるでしょう。自分の命を大切にすると同じように、他者の命も大切にすること。この学校創立以来、根幹にある理念として心におさめておいていただきたいものです。

「小さなからし種」という松蔭女子学院のモットーは、1ミリほどのちっぽけなからし種が芽を出して根を張り、大きな樹木となり、美しい花を咲かせるように、生徒・学生がこの学校を舞台に成長を遂げる姿を象徴しています。これからは足元に松蔭の柔らかな土はありませんし、穏やかに包み込んできた松蔭の温室から出ていくことになります。「私は大丈夫です」と約束して、明日を迎えていただきたいと思います。私たち教職員一同は「タリタ・クム」の言葉をエールとしお見送りしたいと思います。

“Open Heart, Open Mind”の合言葉をいつまでもお忘れにはならぬよう。いつでも母校にお気軽に立ち寄りくださいますよう。以上、私からのメッセージといたします。

(3月1日 松蔭高等学校卒業式 校長式辞より)